

# 成溪會誌

1997.7 No.85



## 就任

経済学部長に就任して	渡辺 健一	2
中学・高等学校長に就任して	横地 孝	3
小学校長に就任して	濱口 一郎	4

## 特別寄稿

生理学の散歩道	馬詰 良樹	5
安心できる食生活	栗飯原景昭	10
鰻と硫黄島	多辺田光雄	14
魚河岸、うまいもの、——ザックバラン	金子 喬一	18
化粧についてのよもやま話	高橋 稔	22

## 随想

日光	金谷 太郎	26
水泳部のインターハイへの挑戦	豊島 克	28
「ひらがなの手紙」	堀江はるよ	31
「ちやつきり節」誕生秘話	野尻 泰造	33
オーストラリアの今	松永 義明	35
バンコック雑感	東垣内英哉	37
隣の国	桑田 成美	39

自分と出会う 高井有一 41 旧制高校特別展 57 物故会員 57

退職挨拶 58 書評 60 予告 60・77

学術・教育助成研究報告 61 成蹊学園の近況 64

学園史料館資料紹介 70 図書館蔵書紹介 72

## 同窓のつどい

- 第20回桜祭 ..... 42
  - 恩師を囲んで ..... 44
  - 学校・年次会・ゼミOB会のつどい ..... 46
  - 体育会・文化会OB会 ..... 49
  - 業界・企業のつどい ..... 52
  - 地域のつどい ..... 53
- 船越学級クラス会  
 桃伍会 田中和夫ゼミOB会 亀村先生の会  
 高校卒業30周年 大学卒業30周年  
 瀬元美知男先生お別れの会  
 小学校卒業生同窓会 清和会  
 旧高24回ゴルフ懇親会 小学校28回合同クラス会  
 やよい会総会  
 軟式庭球部創立40周年 蹊泳会創立60周年  
 茶道部総長邸最終茶会 成蹊ラグークラブ総会  
 準硬式野球部OB総会 箱根駅伝出場選手集い  
 魚河岸成蹊会 プレメ同窓会・成蹊医会総会  
 観光成蹊会  
 ニューヨーク成蹊会  
 オーストラリア・クイーンズランド成蹊会  
 北海道成蹊会総会 川口成蹊会創立総会  
 長野成蹊会 愛知成蹊会 三重成蹊会  
 岐阜成蹊会 岡山成蹊会

アジア太平洋研究センター73 平成8年度寄付金芳名録75

成蹊会事業報告76 第74回枯林忌77 新聞記事より77

表紙絵の言葉77 成蹊会報告78

表紙の題字は故上條信山先生、絵は高山知也(文51年)

# 随想

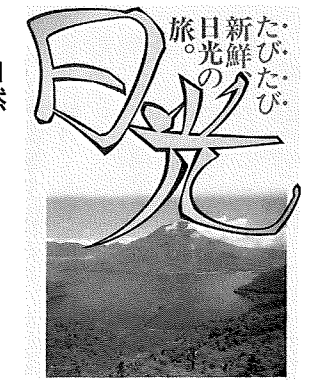
## 日光

金谷太郎

この稿を読まれる方の中には六〇年程昔の十月、成蹊小学校の日光への修学旅行を覚えておられる方もあるだろう。たしか三学年合同（といっても二百人足らず）ケーブルカーに乗って中禅寺に昇り、米屋旅館（今も健在）に一泊した旅行だったが、私自身、あるとき東照宮を観た覚えがまるでない。

昭和四十七年、四十台の半ばをすぎた日光に戻って住み着いた私の戦前の思い出は、夏休みに祖父に連れられて

散歩した東照宮の周辺と、独りで追った蝶の通り道。日光で生まれ育った方々と違って、日光のお祭り行事にも参加した経験もない。日光に旅するお客様をお泊めする生業を始めてからの四代目として甚だ不埒な話ながら隠してみても始まらない。ただ、他方、観光地としての日光をあまり身びいきなしに他と比べられる利点もある。編集部のお勧めのままに、日光のどこが面白いのか、私なりに書くことにする。



自然



湖岸に現れた鹿(ホテル敷地内)

まず、自然である。日光駅（東武鉄道・JR共）に降り立つと、すぐそばの霧降大橋から眼前に広がる標高二千メートル級の山並みは左手に男体山、その東（右手）に女峰・赤薙と東西十五キロメートルにわたる。年のほぼ半分、雪をいたたく山頂からふもとへのスロープはコマツガ・ブナ・カエデに覆われ、新緑から紅葉へと色を変える。東端の霧降高原へは霧降大橋から二車線の道路があり、霧降を越えた裏側が鬼怒川・栗山である。これら前日光の山々へは四月から十月末ころまで神橋を中心とする日光市街から山道が開けているが、傾斜が急でハイキングよりは登山である。

駅前から町筋を通る国道二二〇号を約一・五キロで大谷川を渡ると上流に向かい神橋を左手に見て右側が二社一寺のある山内地区。いろは坂の起点

馬返は日光駅から約一〇キロ。登り専用第二いろは坂（二車線九キロ）を上ると中禅寺湖尻の中宮祠に至る（標高二二六九m）。

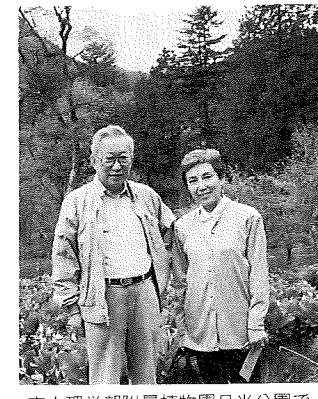
華厳の滝もさることながらバス停脇にある県立日光自然博物館に立寄られるとよい（四月一日〜十一月十日は無休。九時〜十七時）。中禅寺湖の生立ち・日光の自然を優れた映像とサウンドでマルチスクリーンに映し出す「悠久の四季」（十五分）は、ここから先、中禅寺湖、戦場ヶ原、湯元へと男体山の西側に拡がり、金精峠・白根山で群馬県と境する奥日光探索のよいガイドとなる。動植物の展示とともに、子供向けに日光の動物の足跡、鳥の鳴き声、蝶・昆虫の名前等を検索するパソコン装置があり、大人でも楽しめる。

山地帯（海拔一三〇〇〜一五〇〇m、低山帯上部またはブナ帯）の自然探勝には中禅寺湖畔、戦場ヶ原、湯元がよ

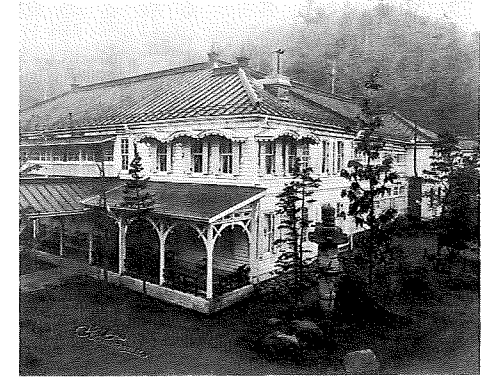
い。比較的平坦な手頃な探索路と標識が整備されている。湯元から湯川にそって龍頭の滝に至る道、途中から湿原を横切って小田代ヶ原に抜ける道等、いずれも徒歩で一〜一・五時間のルートがいくつか選べる。私は夏から秋にかけては「湯滝」でバスを降り小田代ヶ原に抜けて、草原に独り立つ貴婦人と呼ばれる白樺を見るのが好きだ。そこからは戦場ヶ原入口の赤沼までハイブリッドバスが拾えるが、奥日光に典型的なミズナラとクマザサの林を歩いて楽しむことができる。奥日光探訪については、ハイキングコースから動物、宿泊、温泉に至るまで森羅万象を巧みに書き分けた手頃なハンドブックがある。

### 社寺建築と由来

日光のもう一つの特色は前後千年にまたがる社寺建築とその由来である。



東大理学部附属植物園日光分園で



明治時代の金谷ホテル

奈良時代の末期に下野薬師寺出身の僧・勝道（上人）が、現在の神橋のほとりに庵を結び（西暦七六二）、補陀洛山（フダラクニニ荒川男体山）の頂上をきわめて三荒山の神を祀り、神仏習合霊場・日光山を開いて以来、続く平安、鎌倉、室町期の栄枯盛衰を経た日光山に江戸初期、將軍徳川家康によって五代日光山貫首に任じられた僧天海（僧正）が、初代將軍家康の遺骸を久能山から日光山へ遷葬して神・東照大権現としてまつり（元和三年一六一七）、以降、徳川家代々の庇護のもと日光ご神領、二万五千石を持つに至る。日光奉行が山領の行政と東照宮や山内の警備にあたり、日光山の神仏事は日光山貫首があたることになった。後水

尾天皇の皇子守澄親王が貫首となられ日光山に輪王寺の号を賜って（二六五五）、以降江戸幕府の終焉まで十二人の皇子が貫首の座につかれた。開山からここまでの約千年、城内一帯の建造物は再三に及ぶ地震・火事をのりこえて復興再建を重ねている。幕末の戊申の役に際しても官・幕軍の干支から危うく逃れ、続く山領喪失による財政窮乏もご下賜金や民間の喜捨（保見金）で助けられて「山内」の地一キロ四方に集中して存続し、現在一般の参詣・観覧に供されている。

然しながら東照宮の造営や明治の神仏分離令にまつわる移転のために建物の位置が変わっており、二社一寺共通の拝観券の一般的な順路では時系列にたどれない。だから殿堂案内人の羅列的な案内について回っても好奇心は湧くより早くなえてしまう。「講」のような信仰的な参詣を除き、学生（児童）・一般を含む団体の入込が年々減少しているのはデイズニランドや他のテーマパークの影響だけでもなからう。

幸いなことに、近年手引ともなる好著が現れた。「輪王寺の宝ものがたり」と「東照宮再発見」。両書とも輪王寺と東照宮の佛・神の現職によって書か

れている。前者は奈良・平安・鎌倉・室町時代の建造物に使われている色は白・黒・金・朱・群青・淡青・黄土のわずかに七色、極彩色は光線による変化と知るの驚きである。境内の石段は墓所まで全部で二七五段、眠り猫までは六八段で行きつける。人物の彫刻は陽明門と唐門に限られ中国の故事を刻んでいる。テーマは舜帝朝見の儀にある禅讓であり、人を適材適所に配する内平外成であり、何れも乱世を再び起こさぬ平和を願う徳川幕府の政治理念だといふ。

東照宮の建物を飾る彫刻はおびただしく多くて五一七三体を数えるが、うち四〇三三体が植物、動物（四ツ足）

れている。前者は奈良・平安・鎌倉・室町・江戸と明治以降と、時代別で現存地のインデックスマップ付。後者は江戸時代の建造物、彫刻・絵画、歴史・由緒の部に別れて、神社内の若手を集めたフィールドワークの結晶。何れも写真付き。

日光山の三本尊、千手、阿弥陀、馬頭の三体は三仏堂に揃っている。一荒山神社で身近に見られる亭々たる杉の巨木群は、室町時代の初期（一四六七）日光山の権別当昌源が松や杉数万本を植樹した名残りであり、日光杉並木より一七〇年も先行している。

# 水泳部のインターハイへの挑戦

豊島 克

あの日の時

ここに一冊の本があります。「津和毛乃ともが夢のあと……旧制高等学校水泳インターハイ記録……」

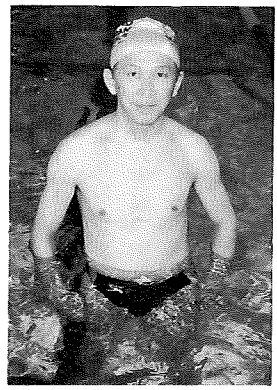
衣笠恵士 編

昨年(平成8年)完成したこの本によると、水泳インターハイ(正式には全国高等学校選手権大会)は昭和3年に第1回大会が開催され、昭和16年、18、19、20年の戦争による中断をへて、昭和23年を最後に旧制高等学校の消滅とともに都合17回の開催をもってその幕を閉じています。

左間の海に育った河童連が水泳選手としてインターハイ目指してのトレーニングを開始したのです。

当時、プールを持たない水泳部は井の頭公園、市立二中(現立川高校)、早大(東伏見)東大(本郷)などプールを求めて転々としながら練習を重ねるといふ不利な条件のもとで、昭和12年にはインターハイ初出場をとげ、昭和13年からは、東部大会で決勝に進出する選手が出始めました。

昭和13年	仙葉敏夫	200米自由形
決勝	2分36秒0	3位
昭和14年	清水 淳	100米背泳
決勝	1分24秒0	3位
清水 淳	200米背泳	
決勝	3分08秒4	4位
昭和15年	清水 淳	100米背泳
決勝	1分24秒9	3位
清水 淳	200米背泳	
決勝	3分10秒6	5位
昭和17年	多門 勉	100米平泳



一方、成蹊水泳部の部誌「望洋」によると、成蹊高等学校水泳部は昭和10年1月その設立を正式に承認され、波

曜日にかかわらず避けた方がよい。その時は五月十月とも霧降高原に廻れる事をお勧めする。花も紅葉もいろいろに優るほど美しい。広大な牧場があるし、車もすいている。

ここに紙面の都合で書き込めない無名・無形の日光の四季の穴場が沢山にある。井上誠一氏設計のゴルフ場もある。釣りやゴルフも含む日光の季節の案内を指す私どものホームページ、<http://www.kanayahotel.co.jp/> (一九九七年七月開設予定)にご期待いただきたい。

\*1 レジャーマップ日光(五万分の二)日光観光協会平成六年七月版一五〇円。最適・必携ながら日光以外では入手困難。ご希望あればお送りします。  
〒三三二-114 日光市上鉢石一三〇〇  
日光金谷ホテル 金谷太郎宛

\*2 「奥日光自然ハンドブック」奥日光自然研究会宮地信良編 自由国民社 (〇三三二五四三二五五四) 一三〇〇円

\*3 「日光山輪王寺 宝ものがたり」中里貞念柴田立史著 東京美術 (〇三三二五三九一一九〇三二) 一五〇〇円

\*4 「謎と不思議 東照宮再発見」高藤晴俊著 日光東照宮社務所 (〇二八八-154-1〇五六〇) 一〇〇〇円

金谷ホテル (旧高・20年)

決勝 1分25秒0 3位

昭和15年8月には待望の自前のプールが完成し、一層の躍進に期待の胸を膨らませました。

然しそれも束の間、戦争は激しさをまして、前記のようにインターハイは中止となり、学園には軍隊が駐留し、最新の設備を誇ったプールは防火用水に、部室は重倉倉(悪いことをした兵隊を閉じ込めておくところ)に転用されるという悲惨な事態になりました。この悲惨な状態で昭和20年8月、終戦をむかえるはこびとなったのです。終戦後の水泳部の立ち直りは、その年、高校生になったばかりの、玉井道雄、富岡亮一、村瀬信次、西原春夫、等を中心に素早くすすめられ、このことが、昭和21、22、23年の水泳部の躍進の原動力となりました。

以上をプロローグとさせていただきます。以下は部誌、「望洋」第11号に記載された部史(第二部)の西原春夫先輩(旧高・23年)の文章のうち戦後3回のインターハイに関する部分をそのまま引用させていただくことにしました。先輩、どうぞお許しください。

西原春夫

インターハイの復活(昭和21年)

今年の冬は殊に長く寒かったような気がした。当時の望洋に、このような言葉が見出される。それは、たしかに、あらゆる意味で実感だったにちがいない。シーズン再開を待ち望む心もさることながら、窮乏に類した戦後の生活状態の中で、この冬の寒さは骨身にこたえるものがあつた。それだけに、春の訪れはどんなにうれしかったことだろう。

中略

五月十九日プール開き。飛田部長の感慨深げな挨拶が忘れられない。かくして昭和二十一年度シーズンの幕は切つて落された(高等科委員長西原、主将玉井、尋常科委員長竹内弟、主将大城)。

中略

七月半ばのインターハイ合宿。当時のメンバーにとつて、この合宿はおそらく一生忘れえないものであろう。朝はスイートン昼はイモパン、夜は雑炊。こういった献立をみるだけでもその様子がうかがわれよう。しかし、それすらもが多数の先輩のご援助によつてはじ

めて可能だったのである。貴重な米を提供して下さった佐藤先輩御一家、朝晩の炊事役を引受けて下さった清水、藤村両先輩、每晚選手への注射に当られた河合先輩、練習監督の多門先輩。現役はただひたすらに泳ぎさえすればよかった。まさに先輩現役一体となつてインターハイを目指した涙ぐましい合宿であつた。

中略

七月二十七日、インターハイ関東予選は学習院プールにおいて幕を落した。全員がトップコンディションでレースに臨むことができたのは多門監督の腕の冴えといわなければならぬ。意気高らかにレースは次々と終り、予選オールパスという成蹊始まって以来の好成果を収めて第一日は終つた。決勝の日、東高、成城とともに三つ巴になつて試合は進んでいった。そして、遂にラストの八百リレーに雌雄を決することになった。三校の強引な接戦は第三泳者まで続いた。強敵を向うにまわし、緊張に顔をひきしめて最後のスタート台に立つた村瀬の姿が今も目に浮かぶ。熱狂的な応援、まさにプー

ルは興奮のつぼと化した。しかし相手はいずれも短距離界の雄、遂にわれわれは敗れて第三位となった。敗れて惜しいのない戦い、だがプールの芝生に円陣を作つて部歌を歌つたとき、みなが泣いた。涙がどめどめと流れてきてどうすることもできなかつた。清純な涙であつた。

後略

優勝を逸す(昭和二十二年)  
昭和二十二年のシーズンは、四月二十日のプール開きにはじまる(高等科委員長西原、主将富岡、水球主将竹内兄、尋常科主将豊島)。

中略

水球リーグが終ると、高等科はただちにインターハイ優勝をめざして競泳練習を開始した。穂坂がマネージャーに就任し、スケジュールは一段と苛酷さを加えた。

(註)

\*この年成蹊は関東学生水球リーグ戦(二部)に優勝して、一部に進んだ。

中略

インターハイ合宿。食糧事情は昨年に比べれば好転したが、まだひどいものであつた。マネージャ